

博士論文審査及び最終試験の結果

本論文は、日本語の動詞否定の四つの形式シナイ、シナカッタ、シテイナイ、シテイナカッタを述語とする文によって表現されるテンス・アスペクトの意味・機能を探究した意欲的な労作である。筆者は、これまで一貫して日本語の否定文を研究対象に取り上げ、否定の焦点、否定の作用域、否定と文階層構造、否定文の時間性など、そのさまざまな現象を豊富なデータ^を駆使して実証的に研究してきたが、本論文では否定文における時間の問題について新しい角度から体系的な記述を詳細に試みている。テンス・アスペクトのような文法範疇は、一般に肯定文との関連で論じられるものであるが、論者は、これを否定文に焦点を置いて深く論究している。

研究を進めるに当たって、対象を動詞否定文を述語とする文に限定している。なかでも、形態的にシナイ/シテイナイ、シナカッタ/シテイナカッタという二組の形式が、述語にとって義務的なテンスの対立を示し、シナイ/シナカッタ、シテイナイ/シテイナカッタの二組の形式が同じように義務的なアスペクトの対立を示すと考えて、的をほぼこれらに絞っている。また、従属文の場合、主文が動詞否定をとるもののみを取り上げ、原則として終止形を中心に扱っている。こうした研究対象の限定は、究明の余地を残すことになっているが、基本についての体系的な記述を目指すための方策として認められる。

本論での記述は、50点余の小説、戯曲、評論などの資料から集めた実例を丹念に検討しながら行われており、各種の形式やそれと共起する副詞類などの頻度・生起率などの指摘が随所に見られ、研究方法の手堅さは、好感が持てる。

記述に先立って、論者はテンスだけでなく、アスペクトも含む包括的な理論的枠組みの構築が必要と考え、欧米の研究成果を最新のものにいたるまで仔細に点検している。その結果、Reichenbach(1947)の理論的枠組みを基礎に、アスペクトも扱う上で必要な修正を加えたJohnson(1981)、時間の副詞的表現が担う二種類の異質な機能を説明する Bertinetto(1986)などの考えを批判的に取り入れて、全体として一つのまとまりのある枠組みを作り上げることに成功しているとみなすことができよう。

論者は、日本語の否定のテンス・アスペクトの研究として重要な工藤(1996)に多くを負いながらも、文法形式のもつ柔軟な抽象的意味・機能を捉える上で、より適切と考える別個の立場を築いている。Reichenbach 的な枠組みは、出来事の局面構造を重視する工藤(1996)の体系でははみ出す先行性アスペクト(パーフェクト相)を同一の基準に基づいて統一的に処理し、展開性を持たない否定文の均質的な事態を捉えるにも有利である。また、この Reichenbach 的な枠組みでは、否定を肯定と著しく性格を異にする言語現象のように捉える必要は生じない、とする。より詳しく言えば、内在的時間指示に関しては日本語の動詞否定文は肯定文と基本的同一性を示す。肯定と否定に関して相違が見られるのは、むしろ、時間軸上の具体的な局限作用を果たす外在的時間指示においてであるとして、実際に外在的時間指示の記述の際に肯定と否定の違いを多く指摘している。肯定と否定の関係をどう捉え、それに文法範疇がどう関わるかは、大きな問題で、簡単に決めることができないが、論者の見方も一つの見識で

ある。ただ、テンス・アスペクトの同一性についてもっと積極的に論拠が提示されるべきであろう。

本論文は、日本語の否定文に新たなテンス・アスペクトの枠組みを導入して、データに基づく克明な記述をしたところに、従来の研究にない成果が見出せる。動詞否定の時間指示を内在的時間指示と外在的時間指示に分けている。前者の規定が動詞の語彙的類別化の問題とも絡んで、厳密さを欠く嫌いがあるが、出来事の非実現を表す動詞否定文と出来事の実現を表す肯定文とでは、出来事の局限方法に違いが生じるとの立場から、外在的時間指示がどう具体的に内在的時間指示を補助、明示、または変更するかを記述した本論第 3 章には、興味深い考察が見られ、独創性に富む。高く評価できる部分といえる。

主な副詞の動詞否定文における共起可能性を詳細に考察した上で、その結果を種類別に表の形に整理してまとめている。これは否定文の時間指示を概観するのに役立つ。さらに進んで表の間の比較検討があってもよかった。

本論文は、上述のように内容の優れた成果と認められるが、審査委員各位から日本語のテンス・アスペクトの研究として多くの問題点や課題の指摘があった。その主要なものをあげる。

- (1) 全体的に本論文は読み取りにくく、構成や提示に工夫の余地が残されている。たとえば、外在的時間表示の章で副詞的表現すべてを徹底的に整理して、帰納的にテンス・アスペクト体系を明らかにすることを期待する。
- (2) 用語の定義や使用が厳密でない場合が見られる。特に先行性アスペクトと状態性アスペクトの区別、参照時の概念規定を深める必要がある。
- (3) 理論的枠組みを確立する際にその論拠を明確に展開すべきである。特にアスペクト理論を扱う場合、ロシア語関係の文献をきちんと参照する必要がある。
- (4) 関係する動詞の語義構造を十分考慮に入れて、否定の時間解釈をすることが必要な場合があると思われる。
- (5) 取りたて助詞の関わり方などを研究して、変化動詞のシテイナイ形式についての分析をもっと深めるべきである。
- (6) 研究対象を広げて、シナイデイル/シナイデイタ、セズニイル/セズニイタの形式も含めた各形式の位置づけをきちんとし、連体用法、連用中止用法などにおけるテンス・アスペクトのありようも扱うことが課題になる。
- (7) 文体差に対する配慮が足りない。少なくとも口語と文章語の相違を考慮に入れるべきである。体系的不均整と思われるものも「共存(並存)する体系」を考えることで解決できる可能性がある。

本研究は、その内容から見て日本語の否定研究に重要な貢献を行うものとして高い評価に値する。また、その成果は今後の日本語教育に資するところも大きい。この研究をもとに、さらに大きい研究テーマに発展しうる。審査委員会の 5 名の委員が全員一致して、総合的にみて、本論文は博士(学術)を授与するに相応しい水準に達していると判定した。